

『臺灣蕃語蒐録』のシャボガラと眉蕃* —セデック語ではなくアタヤル語としての分類—

落合 いずみ

ochiai.izumi.6v@kyoto-u.ac.jp

キーワード: アタヤル語 セデック語 台湾オーストロネシア諸語 小川尚義

要旨

小川 (2006) は台湾オーストロネシア諸語の各言語ごとに基礎語彙項目を収集した資料集である。セデック語 (アタヤル語群) の項目は 26 の文献などから集められている。本稿では、そのうちの 2 つ (シャボガラ方言・眉蕃方言) が実はアタヤル語であることを示す。主にシャボガラ方言のアタヤル語の特徴・地域特定について議論する。比較の手段に用いるのが、伊能 (1998) が記録したアタヤル語とセデック語の語彙表である。これらの比較により、シャボガラ方言はアタヤル語諸方言の中でも伊能が下撈社において収集した語彙に近似すること、さらにこの集落はアタヤル語ツオレ方言の下位方言としての汶水蕃方言に属することを述べる。同様に、眉蕃方言がアタヤル語に属することを語彙の比較により示す。

1 はじめに

本稿はシャボガラ及び眉蕃と呼ばれた、台湾オーストロネシア諸語アタヤル語群に属する方言の分類を問題にする。これらの方言は小川 (2006) ではセデック語に分類されているが、この判断には再検討の余地がある。というのもシャボガラ方言について記録を残した Guérin 自身、その方言がどこで話されていたか述べていないため地点の特定ができない。さらに、シャボガラ方言もそうであるが、眉蕃方言 (これは伊能嘉矩の調査による) も、今日では消滅してしまったため研究対象としては見過ごされてきた。本稿の主張はこの 2 つの方言がセデック語に属するのではなく、アタヤル語に属するというものである。

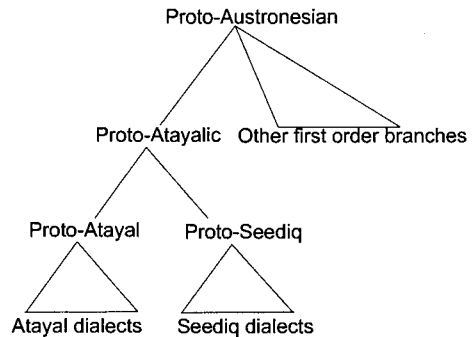


図1 アタヤル語群系統樹

まずこれらの言語の背景であるが、本稿でアタヤル語群と呼ぶものはアタヤル語とセデック語の 2 つの言語を指す。アタヤル語*¹とセデック語*²の両者を合わせてオーストロネシア語族アタヤル語群を成す。台湾中央部の埔里を境にその北側の山地に分布するオーストロネシア諸語である。Blust (1999) に

* 編集部のご担当者並びにおひとりの査読者の方からいただいたご助言に感謝申し上げます。ただし、本稿の不備は筆者の責任である。

*¹ アタヤル語の音素について触れておく。土田 (1988) はアタヤル語にはスコレック方言とツオレ方言のふたつの系列があるとする。Huang (1993:7) によると、スコレック方言に属する烏来方言の音素は、母音が /i, e, a, o, u/ であり、子音が /p, b, k, q, ʔ, b, g, s, z, x, h, ts, m, n, ŋ, l, r, w, j/ である。Huang (1995:16) において、ツオレ方言についても同様の音素が立てられている。

*² セデック語 (バラン方言) の音素について触れておく。母音は /i, e, a, o, u/ であり、子音は /p, b, k, q, ʔ, b, d, g, s, x, h, ts, m, n, ŋ, l, r, w, j/ である。

よればアタヤル語群はオーストロネシア祖語から第一分岐する言語群の1つである(図1参照)。

次に、小川尚義の『臺灣蕃語蒐録』という文献(小川2006)であるが、これは台湾オーストロネシア諸語に関する先行研究や小川自身が1920年代から1930年代に行った調査に基づき、台湾オーストロネシア諸語21言語(アタヤル、セデック、サオ、ブヌン、ツォウ、サアロア、カナカナブ、ルカイ、パイワン、プユマ、アミ、カバラン、バサイ、サイシャット、タオカス、パボラ、バプザ、パゼツヘ、ホアニア、シラヤ、ヤミ語)のそれぞれを方言・地点ごとにまとめた資料集であり、語彙項目数は286語ある。現在は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に資料番号OA101fとして所蔵されている。この小川のノートは李壬癸氏・豊島正之氏が編者として整理を行い出版に至った。セデック語の項目について言えば、26の文献から語彙が収集されている。これらの文献はいくつかのセデック集落においてデータを収集したものであり、調査地点が重複するものもある。その中で「26」という番号が与えられた集落名又は方言名はShabogalaと言い、Guérin(1868)からのデータであることが明記されている。また集落名又は方言名が眉蕃と称される資料番号「19」の出典は「伊能」とだけ記されているが、伊能(1998)であることは語彙項目の一致から明らかである。

Guérin(1868)は、アタヤル語諸方言のうちの1つの方言について文法的観察や歌謡2曲とその注釈、語彙543語項目を記録した文献である*3。Guérinはこの方言をTayalと呼ぶ(「アタヤル」を指す)。また、この方言と同言語だが別の方言と思われるシャボガラShabogala方言というのも別建てで載せられており、語彙38項目を記録している。ただし、Guérinの調査したTayal方言、Shabogala方言ともに、台湾北部という他は調査地点に関する情報は載せられていない。

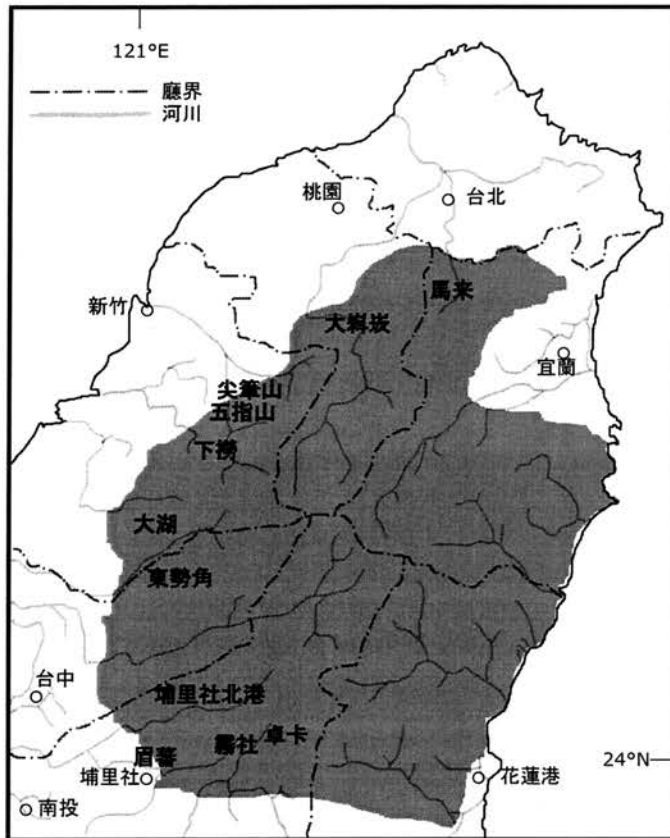
管見の限り、Guérin(1868)はアタヤル語群の言語に関する資料の最も早期のものであるが、この時点でアタヤル語群に2言語(アタヤル語とセデック語)があることは判っていなかったはずである。そして、このシャボガラ方言は小川(2006)によってセデック語に含められた。しかし、筆者の判断ではシャボガラ方言は語彙の特徴からアタヤル語に属することが明らかである。本稿ではそのことを示すために、伊能(1998)の語彙リストを用いる。

台湾の日本統治時代早期、1897年に伊能嘉矩は、台湾各地の集落を訪ね歩き人類学的調査を行った。各部族とも数箇所の地点で基礎語彙(最大で180項目)を収集している。このノートはその後、森口恒一氏が編集し、伊能(1998)として出版に至った。管見の限り、台湾オーストロネシア諸語の基礎語彙比較表として初のものである。しかし、難点として各部族とも集落名のみが²付されているため、どの集落名がどの言語のデータに当たるのか一見してわかりにくい。そのため、これらのデータが再収録されている小川(2006:xi)の言語分類からアタヤル語の項目を参照して、伊能の調査地点中からアタヤル集落を特定した。以下、これらの集落・方言名は括弧の前が伊能の表記、括弧内が小川の表記である。小川において、アタヤル集落に含まれるのは、1. Marai 馬來(馬來)、2. Sinaji: 大料坎(馬武督)、3. Sipaji: 五指山(五指山)、4. Pi:rai 尖筆山(尖筆山)、5. Pi:rai 鹿場(鹿場)、6. Ha:rao 下撈(下撈)、7. Watoan 大湖(太湖)、8. Sumahan 東勢角(東勢角スマハン)、9. Manapan 東勢角(東勢角マナパン)、10. Maivara 埔里社北港(北港マイバライ)である。また小川は、11. Ka'aran 眉蕃(眉番)をセデック語に分類しているが、これはアタヤル語であることを本稿で述べる。この他、小川に再収録された伊能の調査データで、セデック語に含まれるのは、Vainnohu 卓下社(卓卡)とParan 霧社(霧社)である*4。これらの集落は、伊能(1996)の付録地図と森(1917)によるアタヤル語群系種族の分布図を基に図2におおまかな地点を示した。1910年代の行政区分であるため、当時の廳界と現在の縣界は多

*3 このほか、サイシャット語、ツォウ語、ブヌン語、サアロア語、バサイ語、ホアニア語も、アタヤル語に比して少数ではあるが語彙を載せている。

*4 Vainnohu 卓下社(卓卡)は、セデック族トダ支族に相当する。

図2 伊能(1998)が辿ったアタヤル語群系集落



少異なる。図中に陰をつけた部分がアタヤル語群系種族の分布域である。伊能はこの分布のうち、主に西側をなぞるように北から南へと足を運んでいる。

本稿の目的は、シャボガラ方言がアタヤル語に属することを、伊能のアタヤル語諸方言の語彙項目を対照することにより示すことである。まず、Guérinのシャボガラ方言の語彙項目38に相当する、同一の項目を伊能(1998)に求めた。結果シャボガラ方言の27項目が、伊能のデータ中に認められた。次節ではシャボガラ方言の形式と、伊能によるアタヤル族11集落とセデック族1集落のデータを表として示す。セデック集落は2集落(Vainnohu 卓下社とParan 霧社)のうち、Paran 霧社のほうを用いる^{*5}。同様に、語彙の比較により眉蕃Ka'aran^{*6}がアタヤル語に分類されることも示す。

^{*5} これは筆者がバラン方言をより把握しているためである。実際、伊能に見られるVainnohu 卓下社とParan 霧社との語彙の差は微小であり、どちらの方言を用いても本稿の結論に影響を与えるものではないと考える。

^{*6} Ka'aranとは、[kaʔalan]に当たる。眉蕃の近隣に位置するセデック語バラン支族においてこの語は「他の集落、別の集落」を意味する。

2 シャボガラ方言とアタル語群諸方言の対応表

以下 1 から 27 項目まで示すのは、シャボガラ方言 (Guérin 1868)、アタル語群諸方言 (伊能 1998)、セデック語 (伊能 1998) の対応表である*7。1 行目のシャボガラ方言には、Guérin による訳注を付けている。アタル語群諸方言・セデック語には、2 行目において馬來方言 (アタル語方言) に対し伊能による訳注をつけている。セデック語は最終行の右にある Paran 霧社のデータである。またセデック語のみ、筆者の調査による現代セデック語パラン方言の形式を () 内に音韻表記を補った*8。形式が欠ける部分は一で示す。

1	Shabogala	kon '1'		
	Marai 馬來	koto 「一」	Watoan 大湖	koto
	Sinaji: 大料炭	—	Sumahan 東勢角	^k oto
	Sipa:ji: 五指山	koto	Manapan 東勢角	^k oto
	Pi:rai 尖筆山	koto	Maivara 埔里社北港	^k oto ^{ha}
	Pi:rai 鹿場	koto	Ka'aran 眉蕃	oto ^{ho}
	Ha:rao 下撈	koto	Paran 霧社	keyal, oin (kijan)
2	Shabogala	roussa '2'		
	Marai 馬來	sajin 「二」	Watoan 大湖	sajin
	Sinaji: 大料炭	—	Sumahan 東勢角	sajin
	Sipa:ji: 五指山	sajin	Manapan 東勢角	sajin
	Pi:rai 尖筆山	sajin	Maivara 埔里社北港	sain
	Pi:rai 鹿場	sejin	Ka'aran 眉蕃	sain
	Ha:rao 下撈	sajin	Paran 霧社	daha: (daha)
3	Shabogala	touo '3'		
	Marai 馬來	tungal 「三」	Watoan 大湖	tungal
	Sinaji: 大料炭	—	Sumahan 東勢角	tungal
	Sipa:ji: 五指山	tyungan(l)	Manapan 東勢角	tungal
	Pi:rai 尖筆山	tyungan(l)	Maivara 埔里社北港	tongal
	Pi:rai 鹿場	tyungal	Ka'aran 眉蕃	tongal
	Ha:rao 下撈	to:ngal	Paran 霧社	ttel (teru)

*7 項目 12 に関しては「汝食飯」という表現から「食べる」という語を抜き出した。

*8 なお、伊能の表記におけるセデック語霧社方言の r は現代セデック語パラン方言の r と l に対応し、伊能の l も r と l に対応するという不一致が見られる。

- 4 Shabogala soupat '4'
- | | | | |
|-------------|------------------------|---------------|---------------------------|
| Marai 馬來 | paiya ^t 「四」 | Watoan 大湖 | supaya |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | paiyat |
| Sipaji: 五指山 | paiya ^t | Manapan 東勢角 | paiyat |
| Pi:rai 尖筆山 | paiya ^t | Maivara 埔里社北港 | paiya ^t |
| Pi:rai 鹿場 | paiya ^t | Ka'aran 眉蕃 | paiya ^{ts} |
| Ha:rao 下撈 | supa ^t | Paran 霧社 | sepa ^t (sepat) |
- 5 Shabogala tima '5'
- | | | | |
|-------------|------------------|---------------|-------------|
| Marai 馬來 | ma:ngal 「五」 | Watoan 大湖 | ma:ngal |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | ma:ngal |
| Sipaji: 五指山 | ma:ngan, ma:ngal | Manapan 東勢角 | ma:ngal |
| Pi:rai 尖筆山 | ma:ngan, ma:ngal | Maivara 埔里社北港 | ma:ngal |
| Pi:rai 鹿場 | ma:ngan, ma:ngal | Ka'aran 眉蕃 | ma:gal |
| Ha:rao 下撈 | ma:ngal | Paran 霧社 | rima (rima) |
- 6 Shabogala mato '6'
- | | | | |
|-------------|----------------|---------------|------------------|
| Marai 馬來 | teyu 「六」 | Watoan 大湖 | matayu |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | matayu |
| Sipaji: 五指山 | matayu | Manapan 東勢角 | matayu |
| Pi:rai 尖筆山 | matayu | Maivara 埔里社北港 | matayu |
| Pi:rai 鹿場 | mutayo, musuyo | Ka'aran 眉蕃 | taiyu |
| Ha:rao 下撈 | matayu | Paran 霧社 | matel (mumuteru) |
- 7 Shabogala pitou '7'
- | | | | |
|-------------|-----------|---------------|-----------------------|
| Marai 馬來 | pitoo 「七」 | Watoan 大湖 | pitoo |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | pitoo |
| Sipaji: 五指山 | pitoo | Manapan 東勢角 | pitoo |
| Pi:rai 尖筆山 | pitoo | Maivara 埔里社北港 | pitoo |
| Pi:rai 鹿場 | pitoo | Ka'aran 眉蕃 | pitu |
| Ha:rao 下撈 | pito | Paran 霧社 | mapitoo, pitu (mpitu) |
- 8 Shabogala aspat '8'
- | | | | |
|-------------|-----------------------|---------------|----------------------------------|
| Marai 馬來 | sipa ^t 「八」 | Watoan 大湖 | maspa ^t |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | masapa ^t |
| Sipaji: 五指山 | sapa ^t | Manapan 東勢角 | masapa ^t |
| Pi:rai 尖筆山 | sapa ^t | Maivara 埔里社北港 | masapa ^t |
| Pi:rai 鹿場 | sapa ^t | Ka'aran 眉蕃 | sapa ^{ts} |
| Ha:rao 下撈 | maspa ^t | Paran 霧社 | masepa ^t (mumusepats) |

- 9 Shabogala takéisso '9'
- | | | | |
|-------------|------------------|---------------|-------------------|
| Marai 馬來 | kairo: 「九」 | Watoan 大湖 | makaiso |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | maiso |
| Sipaji: 五指山 | taiso, maiso | Manapan 東勢角 | maiso |
| Pi:rai 尖筆山 | taiso | Maivara 埔里社北港 | maiso |
| Pi:rai 鹿場 | tyso | Ka'aran 眉蕃 | yi:l |
| Ha:rao 下撈 | takaiso, makaiso | Paran 霧社 | mangali (munjari) |
- 10 Shabogala moulpo '10'
- | | | | |
|-------------|---------------|---------------|----------------|
| Marai 馬來 | mippo 「十」 | Watoan 大湖 | marppo: |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | mappo: |
| Sipaji: 五指山 | mappo, marapo | Manapan 東勢角 | mappo: |
| Pi:rai 尖筆山 | mappo | Maivara 埔里社北港 | mappo: |
| Pi:rai 鹿場 | ppo | Ka'aran 眉蕃 | mappao |
| Ha:rao 下撈 | marppo: | Paran 霧社 | mahkal (maxan) |
- 11 Shabogala apoué 'feu'
- | | | | |
|-------------|-------------------------|---------------|------------------------------|
| Marai 馬來 | ponnya ^k 「火」 | Watoan 大湖 | aponnya ^k |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | hapohe |
| Sipaji: 五指山 | po:nya ^k | Manapan 東勢角 | hapone |
| Pi:rai 尖筆山 | ponya ^k | Maivara 埔里社北港 | hapone |
| Pi:rai 鹿場 | aponnya ^k | Ka'aran 眉蕃 | hapone |
| Ha:rao 下撈 | hapoi | Paran 霧社 | ponnya ^{ka} (puniq) |
- 12 Shabogala ganliek 'manger'
- | | | | |
|-------------|-------------|---------------|----------------------|
| Marai 馬來 | mannyak 「食」 | Watoan 大湖 | mannya ^{ka} |
| Sinaji: 大料炭 | — | Sumahan 東勢角 | mannya ^k |
| Sipaji: 五指山 | — | Manapan 東勢角 | mannya ^k |
| Pi:rai 尖筆山 | mannyak | Maivara 埔里社北港 | mane ^k |
| Pi:rai 鹿場 | — | Ka'aran 眉蕃 | kane |
| Ha:rao 下撈 | — | Paran 霧社 | myakani (mekan) |
- 13 Shabogala mamalikou 'homme'
- | | | | |
|-------------|-------------|---------------|---------------------|
| Marai 馬來 | varekui 「男」 | Watoan 大湖 | marekui |
| Sinaji: 大料炭 | murekoi | Sumahan 東勢角 | marekui |
| Sipaji: 五指山 | marikui | Manapan 東勢角 | marekui |
| Pi:rai 尖筆山 | marikui | Maivara 埔里社北港 | mane ^k |
| Pi:rai 鹿場 | — | Ka'aran 眉蕃 | murekoi |
| Ha:rao 下撈 | marekui | Paran 霧社 | risau (riso 「青年男子」) |

- 14 Shabogala anaouno 'femme'
- | | | | |
|-------------|--------------|---------------|---------------------|
| Marai 馬來 | kanairin 「女」 | Watoan 大湖 | kuneril |
| Sinaji: 大料坎 | kunairin | Sumahan 東勢角 | kuneril |
| Sipaji: 五指山 | kanairin | Manapan 東勢角 | kuneril |
| Pi:rai 尖筆山 | kanairin | Maivara 埔里社北港 | kanairil |
| Pi:rai 鹿場 | kanerin | Ka'aran 眉蕃 | kanairil |
| Ha:rao 下撈 | kuneril | Paran 霧社 | woyuwa (weewa 「少女」) |
- 15 Shabogala laké 'enfant'
- | | | | |
|-------------|---------------------|---------------|--------------|
| Marai 馬來 | rakkei 「子」 | Watoan 大湖 | rakke, rrake |
| Sinaji: 大料坎 | rakei | Sumahan 東勢角 | rraye |
| Sipaji: 五指山 | rayye, rakke, yarim | Manapan 東勢角 | rraye |
| Pi:rai 尖筆山 | rakkei | Maivara 埔里社北港 | rraye |
| Pi:rai 鹿場 | rakke | Ka'aran 眉蕃 | arraai |
| Ha:rao 下撈 | rakke | Paran 霧社 | rakai (laqi) |
- 16 Shabogala ouïl 'chien'
- | | | | |
|-------------|------------|---------------|---------------|
| Marai 馬來 | hoiyen 「犬」 | Watoan 大湖 | hoiyel |
| Sinaji: 大料坎 | — | Sumahan 東勢角 | hoysel |
| Sipaji: 五指山 | hoiyel | Manapan 東勢角 | hoysel |
| Pi:rai 尖筆山 | hoyen | Maivara 埔里社北港 | hoysel |
| Pi:rai 鹿場 | — | Ka'aran 眉蕃 | holen |
| Ha:rao 下撈 | hoiyel | Paran 霧社 | hoyen (huliŋ) |
- 17 Shabogala aï-loun 'volaille'
- | | | | |
|-------------|-----------------------------|---------------|-----------------------------|
| Marai 馬來 | kaphannya ^k 「鳥」 | Watoan 大湖 | kaphannya ^k |
| Sinaji: 大料坎 | — | Sumahan 東勢角 | kwa:ri ^t |
| Sipaji: 五指山 | hannya ^k , kwari | Manapan 東勢角 | kwa:ri ^t |
| Pi:rai 尖筆山 | kaphanya ^{ka} | Maivara 埔里社北港 | paiye ^{ts} |
| Pi:rai 鹿場 | — | Ka'aran 眉蕃 | pi'its |
| Ha:rao 下撈 | kwa:ri | Paran 霧社 | vahene (qubuheni, qubeheni) |
- 18 Shabogala patous 'fusil'
- | | | | |
|-------------|-----------|---------------|----------------|
| Marai 馬來 | patos 「銃」 | Watoan 大湖 | pato:s |
| Sinaji: 大料坎 | — | Sumahan 東勢角 | pato:s |
| Sipaji: 五指山 | patos | Manapan 東勢角 | patos |
| Pi:rai 尖筆山 | patos | Maivara 埔里社北港 | pa:tos |
| Pi:rai 鹿場 | patos | Ka'aran 眉蕃 | patas, pohon |
| Ha:rao 下撈 | patos | Paran 霧社 | ha:ron (haluj) |

- 19 Shabogala takis 'couteau'
 Marai 馬來 rakao 「刀」 Watoan 大湖 ta:kes
 Sinaji: 大料炭 — Sumahan 東勢角 pu:tin
 Sipaji: 五指山 pu:tsin Manapan 東勢角 putin
 Pi:rai 尖筆山 putin Maivara 埔里社北港 pu:tin, ra:rao
 Pi:rai 鹿場 takusi Ka'aran 眉蕃 puten
 Ha:rao 下撈 takes Paran 霧社 sma:da^t (sulumadats, hulumadats)
- 20 Shabogala ankoui-vakanloch 'peau de cerf'
 Marai 馬來 wokannohu 「鹿」 Watoan 大湖 wakannohu
 Sinaji: 大料炭 — Sumahan 東勢角 woannohu
 Sipaji: 五指山 wokannohu Manapan 東勢角 oannohu
 Pi:rai 尖筆山 wokannohu Maivara 埔里社北港 oannohu
 Pi:rai 鹿場 kanohu Ka'aran 眉蕃 owannohu
 Ha:rao 下撈 wakannohu Paran 霧社 okainnohu (ruqenux)
- 21 Shabogala tania 'entendre'
 Marai 馬來 papa^k 「耳」 Watoan 大湖 ssagya
 Sinaji: 大料炭 papa^k Sumahan 東勢角 papa^k
 Sipaji: 五指山 papa^k Manapan 東勢角 papa^k
 Pi:rai 尖筆山 papa^{ka} Maivara 埔里社北港 pa:pa^k
 Pi:rai 鹿場 papa^k Ka'aran 眉蕃 papa^k
 Ha:rao 下撈 tsiangiya Paran 霧社 virats (birats)
- 22 Shabogala kaouni 'maison'
 Marai 馬來 — 「木」 Watoan 大湖 kahonya^k
 Sinaji: 大料炭 — Sumahan 東勢角 kahone
 Sipaji: 五指山 kaoni^k Manapan 東勢角 kahone
 Pi:rai 尖筆山 kahone^{ka} Maivara 埔里社北港 kahone
 Pi:rai 鹿場 — Ka'aran 眉蕃 hune
 Ha:rao 下撈 — Paran 霧社 po:ne (quhuni)
- 23 Shabogala makéilop 'dormir'
 Marai 馬來 ma-ave 「寝」 Watoan 大湖 makero^P
 Sinaji: 大料炭 — Sumahan 東勢角 ma-ave
 Sipaji: 五指山 ma:ve Manapan 東勢角 ma-ave
 Pi:rai 尖筆山 ma:ve Maivara 埔里社北港 ma-ave
 Pi:rai 鹿場 — Ka'aran 眉蕃 ma've
 Ha:rao 下撈 makero^P Paran 霧社 matake (mutaqi)

- | | | | | |
|----|-------------|--|---------------|-------------------------|
| 24 | Shabogala | pakinatassan ‘joue et tatouage de ces parties’ | | |
| | Marai 馬來 | — 「刺墨の種類」 | Watoan 大湖 | patasan |
| | Sinaji: 大料坎 | — | Sumahan 東勢角 | patas |
| | Sipaji: 五指山 | — | Manapan 東勢角 | patas |
| | Pi:rai 尖筆山 | — | Maivara 埔里社北港 | — |
| | Pi:rai 鹿場 | patas | Ka’aran 眉蕃 | patas |
| | Ha:rao 下撈 | — | Paran 霧社 | patasan (putasan) |
| 25 | Shabogala | passikoutaou ‘poitrine et tatouage de ces parties’ | | |
| | Marai 馬來 | ku:tao 「胸」 | Watoan 大湖 | patsigaha |
| | Sinaji: 大料坎 | pusktao | Sumahan 東勢角 | pusko:tao |
| | Sipaji: 五指山 | pusku:tao | Manapan 東勢角 | puskotao |
| | Pi:rai 尖筆山 | pasku:tao | Maivara 埔里社北港 | vaskutao |
| | Pi:rai 鹿場 | — | Ka’aran 眉蕃 | rahovun |
| | Ha:rao 下撈 | patsikahao | Paran 霧社 | te:ran (teheraŋ) |
| 26 | Shabogala | kaba ‘membre supérieur’ | | |
| | Marai 馬來 | kava 「手」 | Watoan 大湖 | ka:va |
| | Sinaji: 大料坎 | kava | Sumahan 東勢角 | kava |
| | Sipaji: 五指山 | kava | Manapan 東勢角 | kava |
| | Pi:rai 尖筆山 | kava | Maivara 埔里社北港 | ava |
| | Pi:rai 鹿場 | keva | Ka’aran 眉蕃 | ava |
| | Ha:rao 下撈 | kava | Paran 霧社 | va:ga (baga) |
| 27 | Shabogala | kakoui ‘membre inférieur’ | | |
| | Marai 馬來 | ka:kai 「足」 | Watoan 大湖 | ka:kai |
| | Sinaji: 大料坎 | ka:kai | Sumahan 東勢角 | ka:kai |
| | Sipaji: 五指山 | ka:kai | Manapan 東勢角 | ka:kai |
| | Pi:rai 尖筆山 | ka:kai | Maivara 埔里社北港 | ka:kai |
| | Pi:rai 鹿場 | kokoi | Ka’aran 眉蕃 | ka:kai |
| | Ha:rao 下撈 | ku:kui | Paran 霧社 | kapal (qapan 「手の平、足の平」) |

3 シャボガラ方言のアタル語としての分類

27の語彙項目は以下の5つのパターンに大別できる。本稿はシャボガラ方言がアタル語に属するのであって、セデック語に属するのではないことを示すのが目的である。その根拠となるのが以下のDとEに当たる。

- A シャボガラ方言と同一の形式がアタル語各方言にも、セデック語にも見られない。しかし、シャボガラ方言・アタル語諸方言・セデック語の各形式は互いに同源語の関係にあり、共通のアタル語群祖語に遡ると考えられる。つまり、シャボガラ方言は特殊な改新で特徴付けられている、またはシャボガラ方言を残して他のアタル語諸方言とセデック語で改新が起こっている。
- B シャボガラ方言の形式と対応するものがアタル語の特定の方言に見られる。しかし、シャボ

ガラ方言の形式はまた、セデック語とも対応する。シャボガラ方言・特定のアタヤル語方言・セデック語の形式は同一のアタヤル語群祖形から発している。

- C シャボガラ方言の形式と対応するものがアタヤル語諸方言全般に見られ、セデック語も同一・類似形式である。つまり共通のアタヤル語群祖語に遡る形式である。
- D シャボガラ方言の形式と対応するものがアタヤル語の特定の方言に見られる。しかも、セデック語とは形式を異にする。本来、セデック語を除く共通のアタヤル祖語から出た形式であるが、シャボガラ方言と特定のアタヤル語方言が共に改新を起こしたか、その他のアタヤル方言が改新を起こしたかどちらかである。
- E シャボガラ方言の形式と対応するものがアタヤル方言全般に見られる。しかも、セデック語とは形式を異にする。シャボガラ語を含めたアタヤル語諸方言は共通のアタヤル祖語に遡る。また、セデック語はこのアタヤル祖語形式を共有しない。

27の語彙項目中、Aは6例、Bは1例、Cは10例、Dは3例、Eは7例得られた。以下では順に、各語彙項目について概説する。以下の説明では、Guérin (1868) によるシャボガラ方言の表記に対し、推定音価を [] 中に記した。例えば、フランス語の表記法に乗っ取って書かれていると考えられるため、ou は [u] に改めた。伊能の表記も推定音価を記した。また、アタヤル語群の言語では分節音に長短の区別が無いため、同一子音の連続で書かれるものは、1つに直した。Li (1981) によってアタヤル語とセデック語の形式からアタヤル語群祖語が再建されている項目の場合は、再建形も説明に加えた。

まず、Aに属するのは、1「一」、2「二」、3「三」、5「五」、6「六」、17「鳥」の6項目である。

1. 「一」 シャボガラ方言は kon [kon] であり、語末に鼻音が添えられている。他のほとんどのアタヤル語諸方言 (眉蕃方言以外) も語頭に ko を持つことでは同一だが、それらの形式の多くは koto [koto] である。または、音節末子音を伴った ^hoto [koto^h] (埔里社北港方言) も見られる。これらはシャボガラ方言とは異なり、第二音節に to または toh を有する。また、セデック語との相違も大きく、セデック語の「一」を伊能は keyal [kejal] と記録している。現代セデック語パラン方言では kijan である (現代では語末の l が n に変わっている)。または、早口になると kijan と発音されることがある。
2. 「二」 シャボガラ方言は roussa [rusa] であるが、類似の形式はアタヤル語諸方言には見られず、それらは sajin [sazin?] または sain [sain] という形式を呈する。また、シャボガラ方言は、パラン方言の形式 daha: [daha] とも異なる。しかし、Li (1981:295) によるアタヤル語群祖語再建形は *duSa? であり、少なくともシャボガラ方言はこの祖形の反映形である。他のアタヤル語諸方言では、祖形から語頭の du を脱落させ、接尾辞 (z)in を加えたと考えられる。アタヤル語群には意味を持たない接辞 (無意味接辞) が付されるという特徴がある (Li 1985)。この接尾辞はその一種だと考えられる。
3. 「三」 シャボガラ方言は touo [tuo] であるが、同一の形式はアタヤル語諸方言に見られない。しかし形式は多少類似しており、多くの方言で語頭が tu または tyu [tɕu] である。それに比べ、セデック語では ttel [teru] (現代セデック語パラン方言 tɛru) であり、初頭子音 t の後の母音が異なる。因みに、Li (1981: 295) によるアタヤル語群祖形は *təru? である。アタヤル語諸方言では接尾辞 ŋal を付加したと考えられる。これも無意味接尾辞の一種と見なせる。
5. 「五」 シャボガラ方言は tima [tima] であるが、相当する形式が他のアタヤル語諸方言に見られない。全て、ma:ngal [maŋal] に近似した形式を持っている。セデック語は rima [rima] であり、初頭子音の異なりを除き、シャボガラ方言と一致している。Li (1981: 284) ではアタヤル語群祖

- 語として *rima? が再建されている。アタヤル語諸方言においては、この形式に無意味接尾辞と見なせる *ŋal* が加わり、語頭の *ri* が脱落していることになる。
6. 「六」 シャボガラ方言は *mato* [mato] である。同一の形式が他のアタヤル語諸方言に見られないが、類似の形式を有する。ほとんどが *matayu* [matayu] またはこの形式から第一音節の *ma* が脱落した類似形式 *teyu* [teyu] (馬来方言)、*taiyu*[taiyu] (眉蕃方言) である。セデック語もアタヤル語諸方言に類似した *matel* [materu] という形式である。アタヤル語群祖形としては **ma-təru?* が再建されている (Li 1981:292)。
17. 「鳥」 シャボガラ方言は *aï-loun* [ailuŋ] であるが、他のアタヤル語諸方言に同一の形式は見られない。これら諸方言には 3 種類の形式が見られ、それぞれ (i) *kaphanya*^k [kaphaniq] 系 (馬来、五指山、尖筆山、大湖) と、(ii) *kwa:ri* [kwari] または *kwa:ri?* [kwarit] 系 (五指山、下撈、東勢角) と、(iii) *paiye*^{ts} [payets] (埔里社北港) または *pi'its* [pi'its] 系 (眉蕃) である。(iii) 系列はセデック語において *palits* (古くは *palit*) という同源語があり、「翼」という意味である。セデック語の「鳥」は、(i) 系列と同語源である形式を持つ。伊能では *vahene* [beheni] であるが、現代セデック語パラン方言では *qubuheni* または *qubeheni* であり、略式では *beheni* となる。しかも、Li (1981:279) はアタヤル語群祖形として、同形式に由来する形式である **kabah-niq* を再建している (-*niq* は無意味接尾辞として分析している)。シャボガラ方言の形式であるが、類似の形式に言及している文献がある。土田 (1988:176) は、アタヤル語にはスコレック方言とツオレ方言二つの系統があるとし、語彙的な差として「鷄」の例を挙げている。ツオレ方言は *yawilung* [yawiluŋ] (音声表記は筆者による) であり、スコレック方言は *ngta?* [ŋta?] である。(恐らく、土田氏自身のフィールドからの情報であろうが、残念ながらこのデータの出典が挙げられていない。) ツオレ方言の *yawilung* [yawiluŋ] というのが、シャボガラ方言の *aï-loun* [ailuŋ] に対応していると考えられる。そうなると、シャボガラ方言はツオレ方言の下位方言だということがわかる。

B の例は、4 「四」 のひとつだけであった。

4. 「四」 シャボガラ方言では *soupat* [supat] である。同一の形式 *supa*^t [supat] が、アタヤル語下撈方言に見られる。大湖方言も類似の形式であり、*supaya* [supaya] である。語末の *ya* を除き、*supa* までの部分がシャボガラ方言と下撈方言とが一致する。その他のアタヤル語方言では *paiya*^t [payat] という形式である。シャボガラ方言はまた、セデック語の *sepa*^t [sepat] にも類似している。アタヤル語群祖語としては **səpat* 「四」 が再建されている (Li 1981:284)。シャボガラ方言と下撈方言において、アタヤル語群祖形がほぼ保たれているのに対し、大湖では語末の *t* が失われ、*ya* が付け加わっている。その他のアタヤル語では祖形の第一音節 *sə* が脱落しており、さらに Li (1985) に言及されているが祖形の語末 *t* の前に *ya* という分節音を無意味接中辞として挿入している。

C に当たるのが、7 「七」、8 「八」、11 「火」、12 「食」、14 「女」、15 「子」、16 「犬」、20 「鹿」、22 「木」、24 「刺墨の種類」の 10 語である。

7. 「七」 シャボガラ方言は *pitou* [pitu] であり、他のアタヤル語諸方言も *pitoo* [pito] などほぼ同一の形式である。セデック語でも *pitu* は同一であり、接頭辞 *ma* の付いた *mapitoo* もある。この接頭辞は現代セデック語パラン方言では 6 以上 10 までの基数を表す語に付く (但し現在では *mu* に変わっている)。Li (1981:291) ではアタヤル語群祖語として **ma-pitu?* と再建されている。

8. 「八」 シャボガラ方言では *aspat* [asəpat] であり、他のアタヤル語諸方言では、シャボガラ方言の形式から語頭母音が脱落し、曖昧母音が別の母音に替わった形式、*sapa^t* [sapat]、または *sipa^t* [sipat] が見られる。下撈方言と大湖方言の *maspa^t* [masəpat] では、シャボガラ方言の形式に対し、語頭に *m* が加わっている。セデック語では、アタヤル語下撈方言・大湖方言と類似の形式、*masepa^t* [masepat] である。Li (1981:282) では、アタヤル語群祖形として **ma-səpat* が再建されている。シャボガラ方言は、祖形から語頭の *m* を取り除いた形式である。
11. 「火」 シャボガラ方言では *apoué* であるが、これは本来、*aponé* [apone/aponi] と書いていたところ、小川又は後の編集者が *n* を *u* で写してしまったと考えられる。他のアタヤル語諸方言では東勢角、埔里社北港、眉蕃ともに *hapone* [hapone/haponi] である。シャボガラ方言に対し、語頭に *h* が付いた以外は同一形式である。大湖方言では *hapo:nya^k* [haponi^aq] であり、鹿場方言では *apponnya^k* [aponi^aq] である。シャボガラ方言はこの二つの方言から、語末の *q* を失った形式をしていると言える。それ以外のアタヤル語方言では、*ponya^k* [poni^aq] という形式であり、セデック語でも *ponnya^{ka}* [poni^aq] (現代セデック語パラン方言は *puniq*) である。Li (1981:283) では、アタヤル語群祖語として **hapu-niq* と **hapuy* のふたつが挙げられており、前者は後者に対し無意味接尾辞 *-niq* が付いたものだとしている。因みに、無意味接尾辞の付着しない形式を保持しているのが、下撈方言の *hapoi* [hapoj/hapuj] である。
12. 「食」 「食べる」という意味の動詞である。シャボガラ方言は *ganliék* [qanli^eq] である。Li (1981:282) のアタヤル語諸方言において、*man-iq* と併せて *qan-iq* という形式が報告されており、このことからシャボガラ語の頭子音も *q* であることが予想されるのだが、Guérin は *g* で書き取っている。伊能の記録したアタヤル語諸方言においては、多くの場合 *manya^k* [mani^aq]、または *mane^k* [mani^aq] (埔里社北港) のような形式である。眉蕃方言は *kane* [qane] で現れている。セデック語は *myakani* [mia-kani] となっているが、このような形式は現代セデック語パラン方言には見られない。現代セデック語パラン方言では *mekan* である。古くは *mia-kaniq* という形式だったが、そこから語末の *iq* が脱落したと考えられる。いずれにしても、シャボガラ方言・アタヤル語諸方言・セデック語において、*qaniq* または *kaniq* の部分が共通している。Li (1981:282) では、アタヤル語群祖形として **kan* を再建し、アタヤル語群のいくつかの方言の語末に現れる *-iq* は無意味接尾辞であると分析する。
14. 「女」 シャボガラ方言では *anaouno* [anaouno] であるが、完全に同一の形式はアタヤル語諸方言に見られない。ただ、アタヤル語諸方言に共通にみられる *kanairin* [kanairin]、*kanairel* [kanairel] などの形式と同源語であると考えられる。シャボガラ方言では語頭の *k* が脱落し、さらに語末が変形していることになる。伊能によるセデック語は、*woyuwa* [wouwa] であり、これは少女をさす。現代セデック語パラン方言で「妻」を指す語は *qedin* であり、古くは *qedil* であった。この *qedil* は、いくつかの音変化を想定しなければならないが、シャボガラ方言を含むほかのアタヤル語諸方言と同源語であると考えられる。アタヤル語群祖語として仮定的に **kaidil* を建てるとすると、アタヤル語では第一音節の後に接中辞的分節音 (恐らく無意味接中辞) *na* を挿入し、さらに *d* を *r* に変えたことになる。セデック語では語頭の *k* を *q* に、母音連続 *ai* を *e* にしたことになる。
15. 「子」 シャボガラ方言は *laké* [laq^ei] である。その他のアタヤル語諸方言も *rakkei* [laq^ei] など、ほぼ同一の形式である。語末母音 *i* の前に *e* が入っているのは、子音 *q* が前にあることによる効

果である。発音部位の低い子音のため i へ向かう渡りの音として e が書かれている。眉蕃方言では arrai [alai] であり、シャボガラ方言の形式の前にさらに母音 a が付け加わっている。また子音 q が脱落している。子音 q の脱落は埔里社北港方言 rraye [laje] にも見られる。Li (1981:280) ではアタヤル語群祖形として *ʔulaqiʔ を建てる。セデック語パラソ方言も、シャボガラ方言やアタヤル語諸方言と同一形式の rakai [laqi] である。

16. 「犬」 シャボガラ方言は ouil [uil] である。アタヤル語諸方言ではほぼ、hoiyel [hojel] という形式が流通している。シャボガラ方言ではこの形式から h が脱落し、母音に多少の変化をきたしているが、これらは同源語と見なせるだろう。セデック語も類似の hoyen [hojen] である（現代セデック語パラソ方言では huliq となる）。
20. 「鹿」 シャボガラ方言で「鹿」に相当するのは vakanloch [waqanrox] である。他の多くのアタヤル語諸方言においてもほぼ類似の wakannohu [waqanox] という形式である。ただ、シャボガラ方言では、r という表記が見られるが、これに相当する音が他のアタヤル語諸方言では消失しているように見受けられる。セデック語でも okainnohu [oqainox] という類似の語である（現代セデック語パラソ方言では ruqenux）。Li (1981:281) ではアタヤル語群祖形として *raqə-nux を再建している（-nux は無意味接尾辞として分析している）。
22. 「木」 Guérin はシャボガラ方言の形式 kaouni [kauni] に「家」という意味を付しているが、これは伊能の項目では「木」に相当する語である。他のアタヤル語諸方言でも kahonya^k [kahoni^q]（大湖方言）に類似した形式を示す。シャボガラ方言では語中 h と語末 q が脱落している。セデック語も現代セデック語パラソ方言では quhuni 「木」と言う。語頭が k から q に変わっているが同源形式である。伊能ではなぜか po:ne という異なる形式で載っている。この形式は現代セデック語パラソ方言には見られない。なお、Li (1981:295) はアタヤル語群祖語に *kahu-niq と *kahuy のふたつを再建している。ここで見られるシャボガラ方言を含めたアタヤル諸語とセデック語は全て前者の反映形である。
24. 「刺墨の種類」 Guérin はシャボガラ方言では pakinatassan [pakinatasan] が、頬とその部位の入墨を表すとしている。これは「描く」という動詞から派生する語である。Li(1981:297) では、「書く、入墨をする」に当たるアタヤル語群祖語を *matas と再建している。これは、セデック語の文法で説明すると動作主態現在形に当たる形式であり、命令形又は否定辞の後に現れる形式は patas（但しこれは古形で、現代パラソ方言では patis である）という。つまり、*matas と平行的に *patas もアタヤル語群祖語に再建できる。シャボガラ方言は、pa<k<in>a>tas-an という形式をしていることになる。小川・浅井 (1935:22-25) の説明を参照すると、<in> という接中辞は過去を表す。この接中辞が挿入されている ka という形式はもともと接頭辞として働き形容的意味を表すものだが、ここでは接中辞になっている。しかも、この接中辞に、先の接中辞 <in> が入っている。接尾辞の -an は場所態を示すものである。シャボガラ方言と同一の成り立ちを持つ形式は他のアタヤル語諸方言に見当たらないが、語根 patas を共有している。鹿場方言、東勢角方言、眉蕃方言では patas そのものであるし、大湖方言では接尾辞 -an の付いた形式 patas-an である。また伊能によるセデック語も大湖方言と同じく接尾辞 -an の付いた形式 patas-an である。

D に属するのは 19 「刀」、21 「耳」、23 「寝」の 3 項目である。

19. 「刀」 シャボガラ方言では takis [takis] である。ほぼ同一の形式が、アタヤル語下撈方言 takes [takes]、大湖方言 ta:kəs [takes]、鹿場方言 takusi [takusi] に見られる。その他のアタヤル語諸方言は pu:tin [putiŋ] のような形式を持つ。馬來方言 rakao と埔里社北港方言 rarao という形式もある。セデック語にはシャボガラ方言の takis に相当する語は見られず、伊能の挙げる sma:daʔ [samadat] は、腰に挿して携帯する刃先の曲がった刀のことを刺す（現代セデック語パラ方言は sulumadats/hulumadats）。この他に現代セデック語パラ方言にも putiŋ 「刃」という形式がある。因みに、Li (1981:286) はアタヤル語群祖語に *putiŋ を再建している。
21. 「耳」 Guérin はシャボガラ方言の tania [taŋia] に「聞く」という意味を与えているが、これは「耳」の意味であると考えられる。類似の形式がアタヤル語下撈方言 tsiangiya [tsiaŋia] に見られる。大湖方言 ssagya [sagia] も同源語であろう。その他のアタヤル語諸方言では papaʔ [papak] という形式である。セデック語はこの2系列とはまた異なり、virats [birats] という形式である。Li (1981:282) は *caŋiaʔ 「耳」をアタヤル語群祖語に再建している。シャボガラ方言・下撈方言・大湖方言に見られる形式が他のアタヤル語諸方言の形式より古い形を保存していると判断していることになる。
23. 「寝」 シャボガラ方言では makéilop [makeilop] であり、ほぼ同一の形式が下撈方言と大湖方言に makeroʔ [makerop] として見られる。他のアタヤル語諸方言では ma-ave [maʔave] のような形式である。セデック語もこれらとは異なる形式 matake [mataqi] である。
- E には9「九」、10「十」、13「男」、18「銃」、25「胸」、26「手」、27「足」の7項目が含まれる。
9. 「九」 シャボガラ方言では takéisso [takeiso] である。同様の形式が、アタヤル語下撈方言に takaiso [takaiso] として挙げられている。その他のアタヤル語諸方言も類似の形式 makaiso (下撈方言・大湖方言)、maisō、taisō などを示し、語末の iso が共通している。ただ、形式がほぼ完全に一致するのは下撈方言である。眉蕃方言だけは異なる形式 yi:l (yil) をもつ。セデック語は、アタヤル語諸方言とは異なる形式、mangali [maŋari] を示す。
10. 「十」 シャボガラ方言では moulpo [mulpo] である。他のアタヤル語方言も mappo: [mapo] が多く、類似の形式である。特に下撈方言・大湖方言の marppo: [malpo] はシャボガラ方言とよく似ている。なお、鹿場方言では ppo [po] のみである。セデック語はこれらとは異なる形式 mahkal [maxal] である。
13. 「男」 シャボガラ方言では mamalikou [mamaliku] であり、語頭の ma の連続は重複によるものと考えられる (maliku を基に初頭音節が重複した)。他のアタヤル語諸方言では marekui [marekui] のような形式を持っている。この形式はセデック語には見られず、伊能は risau [risaw] と記録している。これは青年男性の意味であり、成人男性は現代セデック語パラ方言では ruseno と言う。
18. 「銃」 シャボガラ方言では patous [patuŋ] である。これに相当する形式は他のアタヤル語諸方言全般に patos [patos] などとして見られる。同形式はセデック語では見られない。伊能は ha:ron [haloŋ] と記している。
25. 「胸」 Guérin は、シャボガラ方言の passikoutaou [pasikutaw] は胸または胸部の入墨の意味だとする。この形式と類似した pusktao [pusəkətaʔ] などの形式がアタヤル語諸方言において全般的

に見られる。眉蕃方言だけは特殊な形式 rahovun [rahobun] を持つ。セデック語にはこれらと同源の語は見られない。伊能は te:ran [te?eraŋ] と記している。

26. 「手」 シャボガラ方言の kaba [qaba] と同一の形式 kaba [qaba] が他のアタヤル語諸方言において全般的に見られる。埔里社北港方言と眉蕃方言は語頭の q が脱落し、ava [aba] となっている。セデック語はシャボガラ方言やアタヤル語諸方言とは異なる形式、va:ga [baga] である。しかし、アタヤル語とセデック語は形式上異なるが、同一起源の語に由来する。それが、本来「肩」を意味していたと考えられるアタヤル語群祖語 *qabaga である (Ochiai 2016:295)。シャボガラ方言やアタヤル語諸方言では語末音節の脱落、セデック語では語頭音節の脱落を経たことになる。
27. 「足」 シャボガラ方言では kakoui [kakuj] である。類似の形式は ka:kai [kakaŋ] などとしてアタヤル語諸方言全般に見られる。しかし、セデック語では伊能は kapal [qapaŋ] と記している。これは手の平、足の平のことを意味する語である。「足」は、現代セデック語パラン方言で、papak と言う。

D では、シャボガラ方言がアタヤル語の特定の方言と同一の形式を示し、セデック語とは異なることを述べた。E では、シャボガラ方言とアタヤル語諸方言のほぼ全てが同一形式であるのに対し、セデック語は異なる形式を持つことを述べた。これらを根拠に、シャボガラ方言は、セデック語に属するのではなくアタヤル語に属するとする方がより妥当であると言える。

4 アタヤル語としてのシャボガラ方言の方言区分

ここまで、シャボガラ方言がアタヤル語に属することを議論したが、アタヤル語諸方言のうち、どの方言に最も近いのかを検討してみる。その手がかりとなるのが、シャボガラ方言とほぼ同一の形式を有する特定の方言が見られる項目、4「四」、9「九」、10「十」、19「刀」、23「寝」である。4「四」では、シャボガラ方言 soupat [supat] と一致する形式が下撈方言 supa^t [supat] に、また類似の形式が大湖方言 supaya に見られる。9「九」では、シャボガラ方言 takéisso [takeiso] とほぼ同一の形式は下撈方言 takaiso にのみ見られた。10「十」では、シャボガラ方言 moulpo [mulpo] と同一の形式が下撈方言と大湖方言に marppo: [malpo] として見られる。19「刀」のシャボガラ方言 takis [takis] に相当する語は下撈方言 takes [takes]、大湖方言 ta:kes [takes]、鹿場方言 [takuç] に見られる。21「耳」では、シャボガラ方言 tania [taŋija] に相当する語が下撈方言 tsiangiya [tsiaŋija] と大湖方言 ssagya [sagija] に見られる。23「寝」では、シャボガラ方言 makéilop [makeilop] と同一の語が下撈方言と大湖方言に makero^P [makelop] として見られる。表 1 にこれらの語の対応をまとめた。シャボガラ方言と最も近いのは下撈方言であることがわかる。

表 1: シャボガラ方言と一致する形式を持つアタヤル方言

	シャボガラ方言	下撈方言	大湖方言	鹿場方言
4「四」	sopat[supat]	supa ^t [supat]	supaya [supaja]	—
9「九」	takéisso [takeiso]	takaiso [takaiso]	—	—
10「十」	moulpo [mulpo]	marppo: [malpo]	marppo: [malpo]	—
19「刀」	takis [takis]	takes [takes]	ta:kes [takes]	takusi [takuç]
21「耳」	tania [taŋija]	tsiangiya [tsiaŋija]	ssagya [sagija]	—
23「寝」	makéilop [makeilop]	makero ^P [makelop]	makero ^P [makelop]	—

次にこの下撈方言とは、どの地域で話されるアタル方言かを検討してみる。伊能の日誌 (伊能 1996: 120-126) では 1897 年の 7 月 8 日に八角林 (現在の苗栗縣獅潭鄉新豊村・豊林村) を訪れ、次の日 9 日は和興庄からその東の山地にある下撈社へ訪れたと記録している。次の日 10 日には、大湖撫墾署に寄っている。これらの地域は苗栗縣に属する。

伊能は、下撈社は北蕃 (アタル語群系種族) であるが、すでに漢民族に帰順しているため、他の北蕃のように反抗することはないと記している。伊能 (1996) の編者・翻訳者である楊の注釈によると、客家系漢民族が道光・光緒の年代に、本来アタル族の居住地であったこの一帯に攻め入った。そのため、この地のアタル族は他に移住したが、一部はとどまって漢民族に帰順した。そのグループが築いたのが下撈社だという。また、楊は下撈社という地名は台湾先住民族の分布を示した地図のどれを参照しても見つけられないと説明し、しばらくのちに廃村になったのだろうとも言う。

伊能は下撈のローマ字表記を Ha:rao とする。これは漢字に福建語閩南方言の読みを当てているためである。この音に近い集落名を探したところ、佐山 (1920:4) に「ハロー社」という名が見られた。このハロー社は汶水蕃を成す八つの集落のひとつであり、汶水蕃はの新竹廳太湖支廳 (現苗栗縣) に属し、汶水溪沿岸山地に居住すると説明している。「太湖」とは伊能の記す「大湖」に相当する。また、佐山の調査の時点で、ハロー社は太湖蕃に移住・併合したということになっている。

下撈方言はアタル族汶水蕃に属する言語であることがわかった。そうなるとシャボガラ方言も、汶水蕃に属する言語だと考えられるのだが、佐山の記述する汶水蕃に、シャボガラと言う集落名は見られない。このシャボガラに相当するだろう集落名が、移川他 (1935:62) に見られる。汶水溪沿岸の集落名のひとつに「マバラ (Məbəala)」という名称がある。この集落名の語頭 məは、居住地・種族等を表す一種の接頭辞であるため、語根は beala である。これはシャボガラ shabogala から語頭の sha を除いた部分 bogala に近似する。マバラ Məbəala は語中の g が弱められて消失したのだろう。また、shabogala の語頭 sha- も一種の接頭辞と考えられる*9。

佐山 (1920) には巻末に各地域ごとのアタル集落語彙表が載せられている。その中の汶水蕃の語彙は興味深い。シャボガラ方言と下撈方言で一致しない項目が、佐山の汶水蕃語彙では一致またはほぼ一致していることがある。ただ、佐山が汶水蕃のいくつかの集落うち、どの集落で収集した語彙かは明らかにしていない。それらの項目は、1「一」、2「二」、3「三」、5「五」、6「六」、13「男」、24「刺墨の種類」、25「胸」の 8 つであり、これらシャボガラ方言と佐山の記した汶水蕃方言の形式を示したのが表 2 である。これらの語は母音が多少異なる以外はほぼ同一である。13「男」について言えば、アタル語諸方言も同源語を有するのだが、シャボガラ方言のように語頭重複を持つものは、佐山の記した汶水蕃のみに見られる。24「刺墨の種類」について言えば、シャボガラ方言の語は pa<k<in>a>tas-an という構成であるのに対し、汶水蕃では p<in>atas-an である。シャボガラ方言では ka という分節音が語根 patas に対し接中辞のように挿入されているが、汶水蕃ではこの分節音が見られないという違いはある。しかし、接中辞 <in> を持つことで汶水蕃の形式は、ほかのどのアタル語諸方言よりもシャボガラ方言に近い。なお、佐山の表記はカタカナを用いているため、[] に筆者が仮定する音声表記を補った。

*9 恐らく、セデック族 seediq に見られる、語頭 s の部分も「人」などを表す意味の同一の接頭辞から成るものである (Ochiai 2016:315)。

表 2: シャボガラ方言と汶水蕃

	シャボガラ方言	汶水蕃の語彙
1 「一」	kon [kon]	コン、オン [kon, on]
2 「二」	roussa [rusa]	ロサ [rosa]
3 「三」	touo [tuo]	トオ [too]
5 「五」	tima [tima]	テマ [tema]
6 「六」	mato [mato]	マト [mato]
13 「男」	mamalikou [mamaliku]	ママリクイ [mamaliku]
24 「刺墨の種類」	pakinatassan [pakinatasan]	ピナタサン [pinatasan]
25 「胸」	passikoutaou [pasikutaw]	パシコタウ [pasikotaw]

シャボガラ方言は伊能の調査したアタヤル語諸方言の中では汶水蕃に属する下撈方言に最も近いことがわかった。また、佐山の調査した汶水蕃のある集落の語彙は、下撈方言では一致していない語彙においてシャボガラ方言との一致を示す。そのため Guérin が、シャボガラ方言の語彙を収集したのは汶水蕃であったことはほぼ確実だろう。

5 眉蕃方言のアタヤル語としての分類

小川は眉蕃方言をセデック語に分類しているが、筆者の判断ではアタヤル語である。しかし、ここまで眉蕃方言がアタヤル語に属することを検討せずに議論を進めてきた。ここで改めて、眉蕃方言の帰属する言語について取り上げる。

眉蕃方言というのは、台湾中央に位置する埔里盆地で話されていた言語で、現在では消滅しているが伊能の調査時の 1897 年においてわずかに残されていたようである (伊能 1996:187-191)。埔里盆地を最南端かつ最西端地点として、アタヤル語群系種族はその北東へと広がる。特に、埔里盆地から東に入った山地に広い分布領域を有するのはセデック族である。そのため、埔里盆地のアタヤル語群系の方言である眉蕃もその地域性から判断してセデック語と見なされたと考えられる。

表 3 に示すのは 2 節の対応表から、アタヤル語に属する埔里社北港方言と、問題としている眉蕃方言、セデック語に属する霧社 (パラン) 方言を項目を抜き出したものである。ここで埔里社北港方言をアタヤル語諸方言の代表として選んだのは、眉蕃から距離的に最も近いためである。霧社方言には現代セデック語パラン方言を右列に補い、補足が必要な箇所は 〈 〉 に加えた。推定的音価を [] に示す。このうち、眉蕃方言の語彙がアタヤル語埔里社北港方言と一致またはほぼ一致し、しかもセデック語とは異なりが大きい箇所を太字にする (眉蕃・埔里社北港ともに太字で示す)。

表 3: 眉蕃方言とアタヤル語埔里社北港方言の類似性

	埔里社北港	眉蕃	霧社	現代バラン方言
1. 「一」	koto ^{ha} [kotoh]	oto ^{ho} [otoh]	keyal, oin [kejal, oin]	kijan
2. 「二」	sain [sain]	sain [sain]	daha: [daha]	daha
3. 「三」	tongal [toŋal]	tongal [toŋal]	ttel [teru]	teru
4. 「四」	paiya ^t [pajat]	paiya ^{ts} [pajats]	sepa ^t [sepat]	sepats
5. 「五」	ma:ngal [maŋal]	ma:gal [magal]	rima [rima]	rima
6. 「六」	matayu [mataju]	taiyu [taju]	matel [materu]	mumuteru
7. 「七」	pitoo [pito]	pitu [pitu]	mapitoo, pitu [mapitu, pitu]	mpitu
8. 「八」	masapa ^t [masapat]	sapa ^{ts} [sapats]	masepa ^t [masepat]	mumusepats
9. 「九」	maiso [maiso]	yi:l [jil?]	mangali [maŋari]	muŋari
10. 「十」	mappo: [mapo]	mappao [mapaw]	mahkal [maxal]	maxan
11. 「火」	hapone [hapone]	hapone [hapone]	ponnya ^{ka} [poni ^a q]	puniq
12. 「食」	mane ^k [mani ^e q]	kane [qane]	myakani [mia-kani?]	mekan
13. 「男」	marekui [marekuj]	murekoi [murekoj]	risau [risaw]	riso
14. 「女」	kanairel [kanairel]	kanairil [kanairil]	woyuwa [wojuwa]	weewa 〈qedin 「妻」〉
15. 「子」	rraye [laje]	arrai [alai]	rakai [laq ^a i]	laqi
16. 「犬」	hoyel [hojel]	holen [holen]	hoyen [hojen]	hulinj
17. 「鳥」	paiye ^{ts} [pajets]	pi'its [pi'its]	vahene [bahene]	qubeheni
18. 「銃」	pa:tos [patos]	patas [patas], pohon [pohon]	ha:ron [halon]	haluj
19. 「刀」	pu:tin, ra:rao [putinj, raraw]	puten [puten]	sma:da ^t [samadat]	sulumadats 〈putinj 「刃」〉
20. 「鹿」	oannohu [owanux]	owannohu [owanux]	okainnohu [oqainux]	ruqenux
21. 「耳」	pa:pa ^k [papak]	pa:pa ^k [papak]	virats [birats]	birats
22. 「木」	kahone [kahone]	hune [hune]	po:ne [pone?]	quhuni
23. 「寝」	ma-ave [maʔabe]	ma'ave [maʔabe]	matake [mataq ^e i]	mutaqi
24. 「刺墨」	—	patas [patas]	patasan [patasan]	putasan
25. 「胸」	vaskutao [basəkutaw]	rahovun [rahobun]	te:ran [teʔeraŋ]	teheraŋ
26. 「手」	ava [aba]	ava [aba]	va:ga [baga]	baga
27. 「足」	ka:kai [kaka:j]	ka:kai [kaka:j]	kapal [qapal]	qapan 〈papak 「足」〉

表 3 に見られるように 1 から 6、10、13、17、18、21、23、26、27 の 14 項目という半数以上がセデック語ではなくアタヤル語と一致する形式を持つ。このことから、眉蕃方言はアタヤル語により近いことがわかる。その他の項目について、眉蕃方言の形式はアタヤル語、セデック語両方に類似しており、共通のアタヤル語群祖語に遡る形式を両言語において保存しているものである。それでも、眉蕃方言は稀に、9 「九」 yi:l、25 「胸」 rahovun のように他のアタヤル語諸方言には見られない形式を有する点も特徴的である。

6 おわりに

Guérin(1868)によって38語の語彙項目が記録されたアタヤル語群系の方言「Shabogala」は、小川(2006)ではセデック語に分類されている。本稿では、伊能(1998)のアタヤル語諸方言(11集落)の語彙とセデック語の語彙を比較することにより、シャボガラ方言がセデック語ではなく、アタヤル語に属することを示した。さらに、アタヤル語の中でも、ツオレ方言系の汶水蕃という集落において収集された語彙であることを先行研究(佐山1920)の語彙比較も補いながら主張した。さらに、伊能(1998)の「眉蕃」も小川(2006)ではセデック語に分類されていたが、眉蕃と他のアタヤル語(主に埔里社北港方言)、眉蕃とセデック語の語彙の比較により、眉蕃はアタヤル語により近いことも示した。

Guérinにはもうひとつアタヤル語が紹介されている。「Tayal」と称され538語と歌謡2曲を載せている方言である。Guérinの調査地点を特定し、さらに現代方言との語彙・音韻の変遷を調査することが今後の課題として残されている。

参考文献

- Blust, Robert (1999) Subgrouping, Circularity and Extinction: Some Issues in Austronesian Comparative Linguistics. In *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, edited by Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li, 31-94. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica.
- Guérin, M. (1868) Du Dialecte Tayal ou Aborigène de L'île Formose. *Bulletin de la Société de Géographie* 16: 166-495.
- Huang, M. Lillian (1993) A Study of Atyal Syntax. Taipei: Crane.
- Huang, M. Lillian (1995) A Study of Mayrinax Syntax. Taipei: Crane.
- 伊能嘉矩(1998) 伊能嘉矩: 蕃語調査ノート [森口恒一編]. 東京: 日本順益台湾原住民研究会.
- 伊能嘉矩(1996) 台湾踏査日記<上>. 楊南郡譯. 台北: 遠流.
- Li, Paul Jen-kuei (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic Phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology*, Academia Sinica 52: 235-301.
- Li, Paul Jen-kuei (1985) The Position of Atayal in the Austronesian Family. In *Austronesian Linguistics at the 15th Pacific Science Congress*, edited by Andrew Pawley and Lois Carrington, 257-280. Canberra: Pacific Linguistics.
- 森丑之助(1917) 『臺灣蕃族志』1巻. 台北: 臨時臺灣舊慣調査會.
- Ochiai, Izumi (2016) Bu-hwan Vocabulary Recorded in 1874: Comparison with Seediq Dialects. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 287-324.
- 小川尚義(2006) 『臺灣蕃語集蒐録』李壬癸・豊島正之(編) [アジア・アフリカ基礎語彙シリーズ49] 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 小川尚義・浅井恵倫(1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』台北: 台北帝国大学言語学研究室.
- 佐山融吉(1920) 『蕃族調査報告書: 大么族後編』台北: 臺灣總統府蕃族調査會.
- 土田滋(1988) 「アタヤル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) 『言語学大辞典』1巻: 175-179. 東京: 三省堂.
- 移川子之藏・宮本延人・馬淵東一(1935) 『台湾高砂族系統所属の研究』台北: 台北帝国大学土俗人類学教室.

The Position of Shabogala and Ka'aran as Atayal not Seediq: Reflection on Naoyoshi Ogawa's Comparative Vocabulary

Izumi Ochiai

Keywords: Atayal, Seediq, Formosan languages, Naoyoshi Ogawa

Abstract

Atayalic subgroup of Austronesian contains two languages, Atayal and Seediq. Ogawa's collection of fieldnotes, *A Comparative Vocabulary of Formosan Languages and Dialects* (Ogawa 2006), includes Seediq vocabularies from 26 references. Among them are Shabogala (Guérin 1868) and Ka'aran (Ino 1998). This paper proposes that they are not Seediq but Atayal by way of comparing them with other Atayal dialects and Paran dialect of Seediq. As a result, Shabogala is closest to Ha:rao dialect of Atayal, which belongs to Wen-shui region (also called as Mayrinax). Ka'aran was an Atayalic language once spoken in Puli basin in the central Taiwan. The comparison with other Atayalic dialects shows that more than half of its vocabulary items match that of Atayal. Both Shabogala and Ka'aran show stronger resemblance to Atayal than Seediq.

(おちあい・いずみ 京都大学)